社会教育概論Ⅱ　公開講義

２０１０年１２月２２日（水）２時限目　社会学部低層棟 202 教室

ゲスト講師　武田祐子さんほか、「公民館の学びを考える会」のみなさん

～公民館での学びをテーマに演劇公演をしてくださいます～

参考資料　武田祐子（自主男女共生学級学級生）「学級講座の自主性とはー町田市自主男女共生学級の現状から」『月刊社会教育』「特集　再発見！社会教育事業の可能性」2010 年 12 月号、国土社

★武田さんが書かれたことをもとに、武田さんの公民館での学びの展開を要約すると・・・

１　公民館での学びとの出会いー自ら学ぶ、自然に「助けたい」と「企画」が一致ー

1990 年代末に町田市の公民館で、お子さんを保育室にあずけて学びはじめた武田さん。公民館での学びの魅了され、自主男女共生学級制度の中で、自らも学級を企画・実施。「自然に意欲的に学びたくなる」p.43「同じように苦しむ人を助けたいという自然な気持ちから企画に関ることができる」p.44

２　「誰かのため」の壁

その過程でさらに、仲間とともに、悩みも生まれる。「私たちの企画する学習が多くの人に必要とされていることを嬉しく思いながらも、何年かして壁につきあたってしまった。」「つい『誰かのため』に動いてしまう主婦は、自分の問題を二の次にしてしまう。無理がたたり、私自身もうつを患った。」p.45

３　乗り越える方法としての「表現」ーそして「演劇」

しかし、武田さんたちはそこにとどまってはいなかった。課題を乗り越えるための学習を、公民館でさらに挑戦していく。

新たに企画された学級は、「表現」をテーマに、「演劇」へ。「素人が演劇の手法を使ってどう学ぶかについては大いに悩み」、しかし、「演劇といっても、役者を養成するわけではないので、脚本も演出もすべて全員で話し合って決めることにする。これは今まで公民館が学んだ方法を踏襲したものだが、面白いことに現代の演劇づくりの最先端でもあった」p.46 という。

４　「演劇」表現からさらに深く自己表現へーそしてそれを対象化・共有

しかしまた、その中でもさらに課題にぶつかって、そこからもっと深く、学習が展開し、それはもっと面白い「演劇」方法へと展開していく。

「思い切ってその状況をそのまま脚本の『取っ掛かり』とし、セリフを覚える労力も省くことにした。各人が言いたいことをセリフにしてしまえばよいのだ。こうした苦し紛れの解決策から新しい学習は生まれる。・・・／虚構と現実が一致した瞬間があった。妊娠・出産の恐怖を語り合ううちに、オウム事件を始めとする政治や宗教への恐怖感が子育てに影を落としていると気づいたのだ。心に詰った栓が抜けたように、次々とその人にしかいえないセリフが飛び出した」p.47。

そしてそれは「公演」でもさらに実りを生む。

「公演には全員が出演した。それぞれの問題にそれぞれの方法で向き合い、役作りをした。本物の言葉で語り、自身を演じようとしたのだ。一方、当日の公演は観客参加型とし

たため会場全体がひとつの作品となる一体感もあった。」p.48

５　自らの学習体験の対象化と、それを支えてきた制度・歴史的蓄積に関する認識

武田さんは、仲間とともに展開してきたこの公民館での学習の経験について、改めて次のように、その面白さをまとめている。

「誤解を避けるために付け加えなければいけないのは、このような学習は頭で企画するのではなく、実践を積み重ねることで初めて生まれるのだということだ。社会教育の理念に合致した事業システム、町田独特の公民館の歴史、そして、幅広いさまざまな人たちとの開かれた関係がその土台を支えてくれている」p.48

（武田祐子（自主男女共生学級学級生）「学級講座の自主性とはー町田市自主男女共生学級の現状から」『月刊社会教育』「特集　再発見！社会教育事業の可能性」2010 年 12 月号、国土社より）

★町田市での公民館をめぐる政策動向の問題ー問題を見過ごさず、取り組む力

実は、この武田さんの最後のまとめに、今、町田市の公民館が遭遇している政策危機が示唆されている。

町田市の公民館に「生涯学習センター」を設置する計画がでてきているという。またそこに、「市民大学」（町田市が 1980 年代末に作り出した独特の市民参画社会教育事業制度）を統合するという計画もあるとのこと。

武田さんたちはこの動きに、公民館での学びのあり方がゆがめられていくのではないかという危機意識をもっている。

そこで、現在、「社会教育の機会を保障することを求める請願」署名の運動を展開しているが、先日は、町田市公民館（町田市中央公民館）の公民館まつりで、まさにこの、学んできた「演劇」を通じて、その思いを表現されたとのこと。その公演タイトルは

「ここはどこ？」

補足ー今回、ゲスト講師にお招きすることになった経緯ーチャンスを逃さず！！

～荒井の経験～

１　連続講座の講師としての出会いー「演劇」と集会ー

この政策動向を睨んで武田さんたちが企画した連続講座＜市民企画講座＞「世代を超えて学ぼう　語り合おう　公民館で何かができる！」に、先日、12 月 11 日に呼ばれて「世界の成人教育運動の息吹きが私たちに伝えてくれるものー『学ぶ』ことの大事さを深くとらえ、広く共有していく」という話をした私は、講演後、武田さんたちの「演劇」のことをはじめて知りました。すでに講演の打ち合わせのときから、はじめてお会いした武田さんたちは意気投合して語り合っていたのですが、この講演後の懇談では、文化活動の話が弾み、公民館の重要性を「青い鳥」の物語に重ねて、集会の一幕で演じた住民の方々がいたとの私の話から、武田さんたちの「演劇」の話につながりました。

よく聞くと、なんと面白そう！！

２　文化の力

来年度の講義に、是非ゲストで・・・と話ながらも、ちょうど、今度の講義では、チリのピノチェト軍事独裁政権下で、政治犯として連行された夫、息子、娘たちを返せと運動を展開した女性たちの、「文化」を武器にした運動のドキュメンタリー「パッチワークに願いをこめて」を観て語り合う予定なので、その次に出演してもらえたらとてもタイミングがいい。

さらに、丁度の数回前に、戦後の社会教育の歴史を辿ってきて、「権利としての社会教育」という思想の高みに到達したあと、どんどん政策が後退している状況を大急ぎでたどったところで、「趣味・教養」は受益者負担へという言い方で文化活動・学習活動を公的支援か

ら外し、その裏返しで、「地域貢献」の奉仕活動につながる学習活動なら支援するという、学習を選別支援する施策が展開しても、それに疑問さえもたれない傾向が強まっているなかで、この点でも、武田さんたちの姿勢は輝いている。

そんなふうに思って、恐る恐る、「急ですけれど、再来週はどうですか」とお尋ねしたら、手帳をみて、「大丈夫ですよ」とのお返事。２～３人いれば公演できるとのこと。そして結局、そこにいらっしゃったみなさんのうち、何と、５人も来てくださることに。

３　公民館・社会教育での学びと「演劇」・自己表現－余談も含めて－

武田さんが書かれたという、まだ読んでいなかった、発行されたばかりの記事（『月刊社会教育』2010 年 12 月号）を慌てて読んで、この急遽の依頼に「演劇」公演でも対応できるという意味が分かりました。

武田さんの「演劇」学習について書かれている下りを読んで、popular theater、そしてその一環としての invisible theater、ブラジルでこの popular theater という演劇運動を展開してきた Augusto Boal のことを思い起こしました。

さらにまた、ちょっとこれは余談ですが、先月、観た映画「サイタマのラッパー　Part 2」も思い出してしまった。この映画は、多摩シネマフォーラム（多摩市の公民館から生まれた活動で、毎年多様なジャンルのたくさんの映画を多摩市内の複数のホールで 1 週間集中して上映し、講演会、コンペも行う催しで、今年ですでに 20 回目。観たかったのに観損ねていた「ベンダ・ビリリ」は期待通りでわくわくして観て、また二度目でしたが「ペルシャ猫を誰も知らない」も観て、これはさらに監督との Skyp での中継トークショーで（イラクに亡命中)、「イランはこんなに自由がないのか」というフロアーからの発言に、「イランにも自由な時代があった。自由に対して頑張る世代とそうでない世代とで、様子は大きく変ってしまう。」、「自分が時間をかけてようやく完成させた映画が上映禁止になって相当落ち込んでいたが、音楽の世界では統制を受けてもアングラで頑張っている人たちがいることを知って、勇気づけられた。そこでこの映画を急遽つくった。僅か 19 日で作った。作っていく過程でさらにさまざまなミュージシャンに会い、その情熱にさらに勇気づけられた」と語るのをフロアーで見聞きして感動したのですが、「サイタマのラッパー２」はその同じ会場で、次の部で上映されました)。

武田さんたちが今回、こんな急なお願いを快く受けてくださり、講義で公演くださることになり、とてもありがたく思っています。

学ぶということ、学びを自分たちでつくっていくということ、それを支えているもの、また壊そうとする方向に異議をとなえる力、それを支える学び、文化、学びをささえる表現活動等々、それぞれの視点から武田さんたちのの公演、公演を通じてのおひとりお一人のメッセージを、みんなで受けとめましょう。

2010 年度の社会教育概論Ⅱの締めくくりの講義に、こんなに素敵な方たちをお招きできるなんて、今年の受講生と担当教員は何と幸運なことか。

公開の講義としますので、関心のある方はどうぞ遠慮なく、受講してください。